

逆接の接続助詞「が」「にもかかわらず」と対比を表す助詞「は」「こそ」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学院文学研究科 公開日: 2019-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 丹羽, 哲也 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20190404-008

Title	逆接の接続助詞「が」「にもかかわらず」と対比を表す助詞「は」「こそ」
Author	丹羽, 哲也
Citation	人文研究. 70 巻, p.133-155.
Issue Date	2019-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	井上徹教授：大黒俊二教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

逆接の接続助詞「が」「にもかかわらず」と 対比を表す助詞「は」「こそ」

丹羽 哲也

逆接構文「Pが、Q」は、前件PまたはPから推論されるRと、後件QまたはQから推論されるSとが、肯定と否定の対立関係をなす。この構文は必ず顕在的または潜在的な対立枠を持ち、「台所は広いが、書斎は狭い」のような「対比型」と、「春になったが、まだ寒かった」のような「推論想定型」の二つの種類に分けられる。後者は、前件から推論されて想定される事柄と後件の実際の事柄との対立関係を表すものである。「Pにもかかわらず、Q」構文も、両方のタイプを表すが、用法が限定されている。対比「は」は、対立枠を示す働き、あるいは、対立の位置を端的に示す働きをし、対比「こそ」は、前件が後件に比べて小事と位置付けるという特徴がある。「にもかかわらず」は、そのPからRを推量・希求するという強い性格のために、対比「は」と部分的に共起しにくい場合があり、また、「こそ」とは共起しない。

1. はじめに

逆接関係を表す接続助詞には種々のものがあってそれぞれ特徴があるが、その中で本稿は「が」と「にもかかわらず」を取り上げる。

(1) a 規模は小さいが、収益は多い。

b 規模が小さいにもかかわらず、収益は多い。

(2) a 心配だが、大丈夫だろう。

b?心配であるにもかかわらず、大丈夫だろう。

(1) は a b とも自然であり、(2) は a は自然だが、b は不自然である。また、(1) は助詞「は」によって前件と後件が対比されているが、前件に「こそ」が用いられることもある。

(3) a 規模こそ小さいが、収益は多い。

b?規模こそ小さいにもかかわらず、収益は多い。

(3) a は自然だが、b の「こそ……にもかかわらず」という組み合わせはあまり自然ではない。

本稿は、逆接関係とはどのようなものであるか、「が」と「にもかかわらず」はどのように異なるか、「が」「にもかかわらず」の表す逆接関係と「は」「こそ」の表す対比関係とはどのような関係にあるのか、といった問題の考察を目的とする。

以前、丹羽(1998、以下「旧稿」と呼ぶ)において逆接の接続助詞について論じたが、そこには誤りもあったので、本稿でそれを正すことも意図している。本稿の構成は、2節～5節で逆接関係についての基本的考察を行い、6節以降で、「が」と「にもかかわらず」の相違、対

比「は」の働きや対比「こそ」の特徴、「は」「こそ」と「が」「にもかかわらず」との共起の可否といった問題を扱う。

2. 肯定と否定の対立

逆接の接続助詞は、肯定と否定の対立関係にある前件と後件を結びつける働きをする。

(4) 山田とは時々会うが、田中とは久しく会っていない。

(5) 山田とは時々会うが、田中とはご無沙汰だ。

(6) 兄はサッカーをやっているが、弟は体が弱い。

(4) は同じ「会う」の肯定形と否定形という明らかな対立の例であり、(5) は「田中とはご無沙汰だ」から「田中とは久しく会っていない」ことが推論されることにおいて、肯定と否定の対立をなす。同様に(6) は後件の「弟は体が弱い」→「弟はサッカーをやっていない」という推論によって前件と肯定否定の対立をなす。これは、肯定と否定の対立が読み取ればよいのであり、前件から推論して、「会う」→「ご無沙汰ではない」と「ご無沙汰だ」の対立、「サッカーをやっている」→「体が弱くない」と「体が弱い」の対立と言ってもよい。

ここで「推論」というのは、(4)「ご無沙汰だ→久しく会っていない」というような意味論的含意と呼ばれる場合もあれば、(5)「体が弱い」→「サッカーをやっていない」というような語用論的な推意（会話の推意）と呼ばれる場合もある。以下、特に必要がなければ、その違いには言及しない。

(4)～(6) のような「が」の逆接関係を定義すれば、次のようになる。後述するように、これを「対比的逆接」と呼ぶ。

(7) 「Pが、Q」(対比的逆接)においては、PとQが成立し、PまたはPから推論されるRと、QまたはQから推論されるSとが、肯定否定の対立関係をなす。

この逆接関係は、広く言えば並列関係の一種であるが、

(8) 山田とは三カ月前に会い、田中とは先週会い、中山とはまだ会っていない。

(9) 山田とは三カ月前に会い、田中とは先週会い、中山ともきのう会った。

のような順接的な並列においては、三つ以上の節の並列が可能であり、述語も肯定・否定どちらも同列に扱われる。これに対して、逆接関係は、二つの節のみが肯定と否定で対立する関係を形成する。

肯定と否定の対立関係という中には、前件と後件の述語が反義語であることもある。

(10) こっちの金魚は生きているが、そっちのは死んでいる。(相補的な反義)

(11) 台所は広いが、書斎は狭い。(連続的な反義)

(10) と「こっちの金魚は生きているが、そっちのは生きている」とは同義であるが、(11) と「台所は広いが、書斎は広くない」とを比べれば、「狭い」の方が「広くない」より意味が

限定されている（「狭い→広くない」は成り立つが、逆は成り立たない）。これと同様のことは、述語そのものが等しく補語で対立する場合にもある。

(12) 兄はマンガを読んでいるが、弟は小説を読んでいる。

P「兄はマンガを読んでいる」と、Q「弟は小説を読んでいる」から推論されるS「弟はマンガを読んでいない」とが肯定否定の対立をなすが、Q「弟は小説を読んでいる」の方がS「弟はマンガを読んでいない」よりも意味が限定されている。(11)や(12)は、単に肯定と否定とが対立するというよりも強い対立である。

以上のように、逆接関係は、前件と後件が肯定と否定の対立に還元できる関係にあるものと言う。

3. 対立のあり方：(ア) 対比型逆接

(7)の定義で、「PとQが成立し」とあるのは、前件と後件が対立するとは言っても、後件が前件を全否定することはないということを示している¹⁾。

(13) *太郎は未成年だが、未成年ではない。

という文は、肯定と否定の対立関係にはあるが、当然ながら、前件と後件が矛盾して成り立たない。逆接関係が肯定否定の対立関係にあって矛盾しないのは、これが、

(14) xにおいてpだが、yにおいてpでない。

のように模式化できる対立をなすからである。(4)の例で言えば、xが「山田と」、yが「田中と」である。このx・yを「対立枠」と呼ぶことにする。逆接関係には対立枠が必ず存在するが、(4)のように文の要素として顕在することもあれば、以下に見るように、文の要素の形では現れないこともある。

逆接関係には、その対立のあり方において、(ア)対比的な二つの事柄が対立をなす場合（対比型逆接）と、(イ)推論によって想定された事柄と実際の事柄とが対立をなす場合（推論想定型逆接）とがある。

(ア)対比型逆接は、前件・後件そのものに対立枠が存在（顕在または潜在）するものである。これは次のように分けることができる。

(ア1) 対立枠が同一主語・主題内の二つの要素や側面である場合。

(ア2) 対立枠が二つの主語・主題である場合。

(ア3) 対立枠が二つの空間あるいは時間の場合。

(ア4) 対立枠が二つの抽象的な世界の場合。

(ア1)は、(4)(5)のような例で、「私は」という主題のもと、「山田とは～が、田中とは～」のように文内の要素が対立枠になっている。

(15) ここは豊かな土地だよ。荒々しいが、美しい。 (小説宝石)²⁾

という例は、「ここ」について、一面では「荒々しい」というマイナス評価が成り立つが、もう一面では「美しい」というプラス評価が成り立つ」という対立だが、文の要素として対立枠が顕在化していない（顕在化させる言葉があるとしても「一面、もう一面」のように漠然とした言葉しかない）。

（ア2）は、（6）のような例で「兄は～、弟は～」という異主語・異主題の間の述部が対立するものである（（10）も同様）。なお、（1）（3）（11）も同様だが、「この店は」「この家は」といった大主語・大主題があり、（ア1）でもある。

（ア3）は、

（16）[クロキツネザルは] 生息地はマダガスカル島北西部。木の実や葉っぱを食べるが、園ではリンゴやバナナ、サツマイモ、ニンジンなど果物と野菜を食べている。（毎日1999）
という例は、「生息地では～、園では～」という空間が対立枠の例、次は時間が対立枠の例である。実例としては時間の例が圧倒的に多い。

（17）昔は新築住宅や神社も手がけましたが、今は住宅のリフォームを中心に、少人数でできる範囲でやっています。（毎日2015）

（18）現在の年間保険料は2万200円だが、2万8000円程度になる計算。（毎日2015）

（17）は「昔」と「今」との、（18）は「現在」と「改定後」との対立である。（18）の後件のように、文中に時間そのものが明示されないことも多い。（ア3）の多くは、（17）（18）のように同一主語・主題であり、したがって、これらは（ア1）で対比点（7節参照）が時間要素ということもできる。また、（ア3）には、次のように異主語・異主題の例もある。

（19）従来は最大派閥・橋本派幹部ら一部の実力者が大きな影響力を発揮したが、小泉首相は党の各機関の役割を重視し、自ら直接指示するスタイル。（読売新聞）
これは、「従来」と「小泉首相の時」という時間的な対立でもあり、「一部の実力者」と「小泉首相」という主語者の対立でもあって、（ア2）と（ア3）の両方に属するといえることができる。

（ア4）は、抽象的な空間（世界）が対立枠になっているものである。

（20）WHO報告（一月一日現在）では、世界のエイズ患者数は約四十四万七千人となっているが、推計では、患者百五十万人以上、HIV感染者一千万人以上。（毎日1992）

（21）報酬がなければ生活できない。気持ちとしては返したいが、現実的にできない。

（毎日2008）

（20）は「WHO報告」の世界と「推計」の世界が対立枠、（21）は「（私の）気持ち」の世界と現実世界が対立枠である。

4. 対立のあり方：(イ) 推論想定型逆接

前件と後件の対立のあり方のもう一つの(イ)は、

- (22) 「Pが、Q」(推論想定型逆接)においては、Pが成立し、Pからの推論によって常識的にはRが成立すると話者によって想定されるところ、実際にはQが成立し、RとQまたはQから推論されるSとが肯定否定の対立関係をなす。

のように規定されるもので、次のような例である。

- (23) 春になったが、まだ寒かった。

- (24) 落ち葉がこんもり盛り上がっているのを見つけて掘ってみたが、残念ながら、バカマツタケと呼ばれる別のキノコしか目にできなかった。(読売新聞)

(23)は「春になった」のなら常識的には「暖くなった」と想定(推量)されるのに対して、実際には「まだ寒かった→暖かくなかった」が成立する」という関係を、(24)は、「掘ってみた」なら普通は「マツタケが見つかる」ことが想定(期待)されるところ、実際には「別のキノコしか目にできなかった→マツタケは見つからなかった」という関係を表している。これらの例では、括弧に示したように、「推量」や「期待」という言い方をしてもよいのだが、以下の例のように、それよりも弱い関係の場合もあるため、より広い意味の「想定」という言葉を使っている。

- (25) 都は、以前から三十人未満の個人経営の無認可保育所に助成を行ってきたが、新制度では二十～百二十人規模も対象とし、企業や学校法人などの経営主体も認める。

(朝日新聞)

- (26) 夫と気まづくなった。わたしが文句を云い募ったのがはじまりだ(いつものこと)。2日ほどお互いの目を見ずに過ごしたが、そんなことはつづけていられない。(毎日2015)

(25)は、「以前から三十人未満の個人経営の無認可保育所に助成を行ってきた」からといって「二十～百二十人規模」や「企業や学校法人などの経営主体」の保育所に助成するようになる」ことが予想されるとは言えず、また、助成の拡大を話者(書き手)が期待するという文脈でもない。この場合、前件から、「可能性としては今後もその制度が継続することを話者が想定できる反面、実際には新制度で助成が拡大することになった」という関係を表している。(26)も、「2日ほどお互いの目を見ずに過ごした」ことから、それが継続すると予想あるいは期待されるということにはならない。ここでは、「2日ほどお互いの目を見ずに過ごした」ことから可能性としてはそれが継続することも想定されるところ、その想定とは異なり、実際には「そんなことはつづけていられない」状況にあるということを表す。

この推論想定型の逆接関係における対立枠は、「前件から推論された話者の想定では～、実際には～」というもので、推論による想定される事柄と実際に成立する事柄とのずれを表すという性格のものである。逆接関係において肯定否定の対立が推論を介して成り立つことは2節

で見たが、そこに挙げたのは対比型逆接の例ばかりであった。推論想定型逆接の場合は、推論の働き方が異なる。

(27) 兄はピアノがうまいが、弟は不器用だ。

(28) 兄はピアノがうまく、発表会で入賞した。弟の方は不器用で、入賞できなかった。

(29) 弟は不器用だが、ピアノはうまい。

(27) は「兄は～、弟は～」という対立枠の対比型の例で、「弟は不器用だ」→「弟はピアノがうまくない」という推論において、「兄はピアノがうまい」と対立する。この推論（語用論的な推意）そのものは、逆接関係でなくても働き得るもので、連用中止節の(28)でも、「弟は不器用だ」→「弟はピアノがうまくない」という推論によって「入賞できなかった」という理解ができる。一方、(29) は「弟は不器用ゆえにピアノがうまくないことが想定されるが、実際にはピアノはうまい」という推論想定型の例である。これは言い換えれば、「弟は不器用ゆえに、想定ではピアノがうまくないが、実際にはピアノはうまい」ということであり、前件では推論と想定によって対立枠が形成される。このように、対立枠の形成に上記のような推論が関与するのが推論想定型、関与しないのが対比型ということができる³⁾。

なお、たとえば(イ) 推論想定型の(23)を、

(30) 春になったから、暖かくなっていたのではないかと思うが、実際には寒かった。

のように前件の推論を言語化したものは、「私の思うところでは～、実際には～」という対立枠の(ア) 対比型に属する⁴⁾。

推論想定型は、後件が実際のことを述べるものであるため、後件の述語は事実表明である例が多い((23)～(26)・(29))。しかし、次のように後件で話者が疑問を呈したり、推定したりする例も少なくない。

(31) 下村氏は「あたかも不正があるかのような言い方だが、根拠はあるのか」と顔を紅潮させて反論。(毎日2015)

(32) 母親が自宅にいたが、気付かなかっただけ。(毎日1993)

(31) は「不正があるかのような言い方をするからには、常識的には「根拠がある」と考えられるが、この場合、実際に「根拠はあるのか」と私は疑問に思う」、(32) は「「母親が自宅にいた」ことから、常識的には「(そのことに) 気付いた」と想定されるところ、実際には「気付かなかった」と推定される」という関係で、Pから推論して想定したことと、それに対して考えたことの対立である。次のように、Qが勧誘、希望、意志、当為などを表す例もある。

(33) 危険な目にあうかもしれないが、あと二人、残って欲しくないか。

(命を救え！愛と友情のドラマ)

(34) 掃除嫌いには耳の痛い話だが、ちゃんと予防し、ぜんそくに移行しないようにしたい。

(毎日2015)

(35) 「テロの脅威は現実だが、我々は打ち勝つ。我々はI Sや我々を傷つけようとする他の

いかなる組織も破壊する」と宣言。

(毎日2015)

(36) 公明は「協定書の中身には反対だが、最後は住民自身が決めるべきだ」とのスタンスで、

(毎日2015)

(33) で言えば、「危険な目にあうかもしれない」ことから通常は「(ここに) 残らない」ことが想定されるところ、その反対に「残ってくれないか」と依頼する」ということで、Pから推論によって想定されるところと実際に成立を希求することの対立を表している。

次のように、前件から想定される発話行為と後件の実際の発話行為との対立を示す例もある。

(37) 一口では説明できないが、国家公務員と地方公務員のちがいのようなものがある。

(小説宝石)

これは、「一口では説明できない」ことからここでは説明しないことも想定されるところ、実際には今ここで「国家公務員と地方公務員のちがいのようなものがある」と説明する」という関係が成り立つ。

以上の(ア)対比型逆接と(イ)推論想定型逆接という二つの対立のあり方は、必ずしも排他的なものではない。(15)「荒々しいが、美しい。」という例は、「この土地」について、(ア)「荒々しい→否定的な評価」、「美しい→肯定的評価」という推論において肯定否定の対立をなすが、(イ)「常識的に「荒々しい」ものは「美しくない」ということが想定される反面、この土地については「美しい」が成り立つ」という対立をなす、とも言える。

(38) 「和白天濁を守る会」の主催。ゴミ袋は同会が準備するが、長靴と汚れてもよい服装の準備が必要。

(西日本新聞)

という例においても、「ゴミ袋は同会が準備する→ゴミ袋は自分で準備しなくてよい」と「長靴と汚れてもよい服装は自分の準備が必要」という対比型逆接(ア2)と解釈できるとともに、「ゴミ袋は同会が準備する」ならば他のものも同会が準備してくれる可能性があるとして想定されるところ、実際には「長靴と汚れてもよい服装の準備が必要」という推論想定型の解釈もできる。このように二つの対立のあり方が重なることは少なくない。

5. 先行研究における逆接関係の分類

逆接関係(接続助詞によるもの、および、接続詞によるもの)に、前節までに述べた(ア)のようなタイプと(イ)のようなタイプがあることは、述べ方は様々であるものの、渡部(1995a・b)、丹羽(1998)、石黒(1999)、加藤(2001)、仁科(2014)などによって指摘されている。「対比型逆接」と「推論想定型逆接」という名称は、直接的には、渡部(1995a・b)が、逆接関係を「対比的逆接」と「推論的逆接」に分けていることに基づく。

渡部(1995a・b)は接続詞と接続助詞の両方を扱っているが、前者の例を引くと、「対比的

逆接」は、(39)のように「接続された2文間に、対比された述語的要素を認めるもの」で、

(39) 太郎は背が高い。しかし二郎は背が低い。

「推論的逆接」は、

(40) 一生懸命働いた。しかし仕事も家族もすべてを失ってしまった。

という例において、「一生懸命働いたことから、日常的に妥当な推論として、人生で成功することが含意されている。そしてその推論を前提にして、それに反した事態の成立を逆接の接続詞を用いて示している」と述べる。

加藤(2001:65-72)は、接続詞「しかし」について述べる中で渡部説に言及し、この「対比的逆接」には、「述語的要素」の対比だけでなく、

(41) 今田は車で行くらしい。しかし、松本は電車で行くという。

という副詞的要素の対比や、

(42) 教員数が多い、しかし、学生数も多い。

教育環境という点で「好ましいこと」と「好ましくないこと」という「事態全体が対比されている」例も挙げている。

本稿は、この「対比的逆接」の範囲を広げ、対立枠によって(ア1)～(ア4)に分けた(接続詞の例も、(39)(41)は(ア2)、(42)は(ア2)兼(ア1)に相当する)。また、「推論的逆接」については、基本的にはその考え方に従うが、「推論」ということそのものは、2節のように幅広く見られることであり、この逆接関係において重要なことは、推論によって想定されたことが前件の対立枠を形成するという点である。

加藤(2001)は、渡部の「対比的逆接」を《対比》、「推論的逆接」を《逆接》と呼ぶが、《逆接》にも《対比》を読み取ることができると言う。

(43) 天気予報では午後から雨ということだった。しかし、私は傘を持ってこなかった。

という例は、「前件について「雨の予報」から「傘の携行(の必要性)」を連想し、推測すれば、「傘の携行」と「傘の不携行」という《対比》に解釈できる」と述べる。さらに、

(44) 日本史の試験では9割は正解するだけの自信があった。しかし、結局、半分くらいしかできなかった。

について、「前件と後件が「よい出来(という事前の予測)」と「よくない出来(という事後の結果)」という《対比》をなしているが、「自信があること」から予測される結果とは異なっているという点で《逆接》だとも言える」。このことから、「《逆接》と《対比》は排除しあう概念ではないことが分かった。むしろ、《逆接》も広い意味での《対比》であり、前件と後件から引き出される文脈想定が大きいと、一見、《対比》という解釈が後退するかのように見えるに過ぎないと考えられる」と加藤は結論づけている。

「《逆接》と《対比》は排除しあう概念ではない」ことは、本稿も前節に述べた。「《逆接》も広い意味で《対比》であり」ということについては、本稿は、潜在的なものも含め逆接関係に

においてはすべて対立枠が存在するというように捉えている。

他方、石黒（1999:128）は、逆接関係を次の二つのタイプに分ける。

(45) 値段は高い。しかし、味はあまりよくない。

(46) 値段は高い。しかし、味はいいよ。

(45) は「値段は高い。だから味がいい。」が前提になっており、(46) は「値段は高い。それに味もよくない。」が前提となっている。(45) の方は接続詞「だから」で表されるような因果関係、(46) の方は接続詞「それに」で表されるような並立関係であると述べ、「逆接の用例を眺めて前提をタイプ別に分類していくと、基本的にはこの二つの関係に収斂していくことがわかる」という。ここで「前提」というのは、「意味の上で対になる逆接表現の成立によって否定される元の順接表現」という意味で用いられている。

本稿の分類で言えば、(45) は「値段が高い」からの推論によって「味がよい」ことが想定される一方で、実際には「味はあまりよくない」が成り立つという(イ)推論想定型に属し、(46) は「値段は高い→マイナス評価」、「味はいい→プラス評価」という推論により肯定・否定の関係が成り立つという(ア)対比型逆接に属する。一方で、石黒の挙げる例の中で、

(47) 前者に賛成しないことはいうまでもないが、後者にもにわかには賛成しかねる。

という例は、「前者に賛成しないことはいうまでもなく、後者に賛成である」という並立関係に対応するとされる。これは、本稿の分類では、「前者に賛成しないならば可能性として後者に賛成することが想定されるが、私の場合は、後者にも賛成しかねる」という(イ)推論想定型に属する。つまり、因果関係に対応する例は(45)のように(イ)に属し、並立関係に対応する例は(46)のように(ア)に属するものも、(47)のように(イ)に属するものもある、ということになり、石黒の分類と本稿の分類は並行的ではない。

本稿が石黒の分類に従わないのは、逆接表現のすべてが因果関係と並立関係に対応するというわけではないからである。

(48) 彼はこの問題の重要性に気づいていないが、実際のところ、かなり重要な問題である。という例で対応する文を考えると、因果関係「*彼はこの問題の重要性に気づいていないので、あまり重要な問題ではない」という文も、並立関係「*彼はこの問題の重要性に気づいておらず、あまり重要な問題でもない」という文も矛盾しており不自然である。次のような例もある。

(49) 私事ではあるが、このたびT L 東芝の総監督に就任し、日本協会の役職と兼務することになった。(毎日2015)

これは後件のことを前件で「私事である」と評価する例で、「私事であることから、ここで報告するのがふさわしくない可能性があるところ、それに反して、現実には今ここで「……兼務することになった」と報告する」のように前件と後件の発話行為とが逆接関係になっているものであり(後件の「と報告する」は言語化されない)、こういう場合、「意味の上で対になる、元の順接表現」が求められない(「*私事であり、兼務することにならなかった」も「*私事な

ので、……兼務することにならなかった」も不適切)。また、

(50) 私の提案は、徐々にだが浸透しつつある。(毎日新聞)

という例においては、これに対応する表現として、

(51) 私の提案は、徐々に浸透しつつある。

という文を想定することはできるが、これは連用修飾表現であり、順接表現ではない。順接であれ逆接であれ接続節は主文とは独立して肯定か否定かの判断を持つが、連用修飾句は述部と独立して肯定否定の判断を持たない。この例も、前件と後件の発話行為とが対立する例で、「「徐々に」であるならば、通常「浸透しつつある」とまで言いにくい、現実には今ここで「浸透しつつある」と言明する」のような関係である⁵⁾。

以上のような理由で、順接文との対応関係で逆接を分類するという方針は採らない。

6. 「にもかかわらず」と「が」

さて、「にもかかわらず」についても、対比型と推論想定型との区別はでき、次のように定義される。

(52) 「Pにもかかわらず、Q」(推論想定型)においては、Pが成立し、Pから推論すれば常識的にはRが成り立つと話者によって推量・希求されるところ、実際にはQが成立し、RとQまたはQから推論されるSとが、肯定否定の対立関係をなす。

(53) 「Pにもかかわらず、Q」(対比型)においては、Pが成立すると話者によって推量・希求されるところ、実際にはQが成立し、PとQまたはQから推論されるSとが、肯定否定の対立関係をなす。

次は(52) 推論想定型の例。

(54) メス猫は小さいにもかかわらず、大食いで、1日50グラムほど子猫用の餌を食べます。

(Yahoo!知恵袋)

(55) 二次性高血圧の徴候 1 若年発症の高血圧症である。2 高血圧の家族歴がないにもかかわらず、高血圧が認められる。……

(高血圧)

(56) 米側が100%悪いにもかかわらず、我々に説明がない。(毎日2001)

(57) 多くの人が参加するのもにもかかわらず、私は参加できない。

(54) (55) は推量に反する例で、「メス猫が小さいことから通常なら小食であると推量されるところ、実際には大食いだ」、「高血圧の家族歴がないのならば、本人も高血圧でないと普通は推量されるところ、実際には高血圧が認められる」という関係を表す。(56) (57) は期待や希望に反する例で、「米側が100%悪い以上、常識的には我々に対する説明が期待されるところ、実際には説明がない」、「多くの人が参加するので、私も参加したく思うところ、実際には参加できない」という関係を表す。なお、上の定義では、この「期待」や「希望」、下の(62)の「当

為」などをまとめて、「希求」という言葉を用いている。

「にもかかわらず」の圧倒的に多くの例は、後件の述語が事実表明であるが、一部には、推量や疑問表現の例もある。

(58) 子供部屋がある形跡もなく、家が大いにもかかわらず、大人ばかりの少人数の家族なのかもしれない。
(ロシアンルーレットの女)

(59) 何が言いたいかという、ともに一朝一夕にはできないことにもかかわらず、自己実現というのは少し軽く安易に考えられていないか、ということである。(グッドキャリア)

(58) で言えば、「家が大いことから推論すれば常識的には大家族だと推量されるところ、実際には大人ばかりの少人数の家族であると推量される」という関係で、Pからの常識的な推論を経た推量とこの家族の場合についての推量とが対立関係にある。これに対して、次のbのようにQが意志や命令を表すことはできない。

(60) a 雨が降っているにもかかわらず、{出かけるようだ。／出かけるの?}

b?雨が降っているにもかかわらず、{出かけよう／出かけなさい}。

「雨が降っている」ことから常識的には「出かけない」ことが望まれ、そういう中で「出かけよう」「出かけなさい」と意志を持ったり命令したりすることは考えにくい⁶⁾。こういう点は、(33)～(36)などの「が」に比べて制限が強い。

他方、次は(53)対比型の例である。

(61) 特に国会議員票は、無派閥の票が加算されているはずであるにもかかわらず、三派の所属議員の合計である二百十七票より十票少なかったことのショックは大きい。

(毎日1991)

(62) 核軍縮の模範となるよう先導すべきであるにもかかわらず、核実験を繰り返すことに憤りの念を禁じ得ない。
(毎日2013)

(61) は「国会議員票について推量されるところでは～、実際の投票結果は～」、(62) は「核について要請されることとしては～、実際の行動は～」という潜在的な対立枠を持つ。

「にもかかわらず」を「が」と比べると、対比型については、「が」(7)は(ア1)から(ア4)まで幅広く用いられるが、「にもかかわらず」(53)は(ア4)の一部で、Pが推量・希求された事柄を表し、Qが実際に成立する事柄に限られる。推論想定型については、「が」(22)はPから推論されるRが「想定される」という広い範囲のものであるのに対して、「にもかかわらず」(52)はPから推論されるRが「推量・希求される」という限定された規定になっている。以下、(7)と(22)を対比型、推論想定型の「広タイプ」、(53)と(52)を対比型、推論想定型の「狭タイプ」と呼ぶことにする。

広タイプの「が」は、狭タイプの「にもかかわらず」に置き換えられる場合も、置き換えにくい場合もある。次は推論想定型で、置き換えられる例。

(63) a 以前は軍民共用で1本ずつ使用し、カラチ往復が週3便あったが、駐留後から停止

された。

(朝日新聞)

b 以前は軍民共用で1本ずつ使用し、カラチ往復が週3便あったにもかかわらず、駐留後から停止された。

(64) a それは全く前例のないことであったが、医学に深い理解をいただく所司代は、これを許した。
(事物はじまりの物語)

b それは全く前例のないことであったにもかかわらず、医学に深い理解をいただく所司代は、これを許した。

「以前はカラチ往復が週3便あった」ことから「駐留後も停止されない」ことが期待される」、
「全く前例のない」ことから「所司代は(解剖を)許さないと予想される」、ということは成り立つので、これらは「にもかかわらず」も自然である。一方、次は置き換えにくい例。

(65) a 十代の折に吉原遊郭に売られて遊女をしていたが、梅毒におかされて重症患者として入院していた。
(事物はじまりの物語)

b?十代の折に吉原遊郭に売られて遊女をしていたにもかかわらず、梅毒におかされて重症患者として入院していた。

(66) a かれは、人体の内部がどのようなになっているか知りたいという強い願いをいただき、人体の内臓が似ていると言われていた川獺の解剖をしてみたが、むろんそれは他愛ない試みであった。
(事物はじまりの物語)

b?かれは、人体の内臓が似ていると言われていた川獺の解剖をしてみたにもかかわらず、むろんそれは他愛ない試みであった。

(65) は、「十代の折に吉原遊郭に売られて遊女をしていた」ことから「その頃も遊女を続けていた」ことが可能性としては想定できるが、そうだと推量されるわけではない(当然、期待もされない)ので、「にもかかわらず」は用いられない。(66) も、「川獺の解剖をしてみた」ことから何か成果が得られる可能性は想定できるものの、それを推量したり期待したりすることまではできない。4節の(23)～(26)についても、(23)(24)の「が」の例は「にもかかわらず」に置き換えられる例で、(25)(26)は置き換えにくい例である。このように、PからRの成立する可能性がある想定する「が」に比べて、「にもかかわらず」はPからRを推量・希求するという強い性格がある。「にもかかわらず」が「狭タイプ」であるとともに「強タイプ」であるとも言える。

対比型においては、(ア4)の中で「推量・希求されるところでは～、現実には～」という場合は、「が」と「にもかかわらず」どちらも成り立つ。

(67) a 来るはずだが、まだ来ない。(ア4)

b 来るはずであるにもかかわらず、まだ来ない。(イ)

その他の(ア)については、「が」においては(ア)の例であっても、それに相当する「にもかかわらず」の例は、(イ) = (52)の例として解釈される。

(68) a 姉はとっくに結婚していますが、妹は独身です。(ア2)

b 姉がとっくに結婚しているにもかかわらず、妹は独身です。(イ)

(68) a は、姉妹の結婚について話している文脈での発話で、「姉は～、妹は～」という対立枠を持つ対比型の例に理解できる。これに対して、b は、姉妹の結婚を当然と思っている人が妹を非難するような文脈での発話で、「姉がとっくに結婚しているのだから、妹も結婚していると期待されるところ、実際には妹は独身だ」という推論想定型の解釈が成り立つ。

一方、次の例は、「にもかかわらず」に置き換えにくい。

(69) a 今では桜の花見といえば四月であるが、旧暦時代は三月で、弥生のことを桜月・花見月ともいった。(ア3)

(江戸東京歳時記)

b 今では桜の花見といえば四月であるにもかかわらず、旧暦時代は三月で、弥生のことを桜月・花見月ともいった。

このbが不自然であるのは、現在「桜の花見といえば四月である」からといって「旧暦時代」も「四月である（三月ではない）」と推量される・期待されるとは考えにくいためである⁷⁾。

7. 対比「は」の働き

接続助詞によって逆接関係が表される文の中で、対比を表す「は」がしばしば用いられる。対比関係について、丹羽（2006:183）では次のように述べた（例文番号は本稿のもの）。

対比関係というのは、例えば、

(70) 山田は学生だが、田中は学生ではない。

という例で言うと、「山田」には「学生だ」が結びつき、「田中」には「学生ではない」が結びつくことによって、言い換えれば、「学生だ・学生でない」という点に関して「山田」には肯定が、「田中」には否定が割り当てられるということによって、両者が対立する関係である。

(71) 山田は出かけたが、田中は家にいる。

のように述語動詞が異なっても、「出かけた→家にいない」または「家にいる→出かけていない」という推論によって、「山田」と「田中」の間にやはり肯定と否定の対立が成り立つ。しかし、この説明では逆接の接続助詞「が」の働きと対比「は」の働きが区別できない。前件と後件の肯定否定の対立関係そのものは「が」によって形成される。

(72) a 山田が出かけたが、田中は家にいる。／b 山田は出かけたが、田中が家にいる。

のように一方の「は」が用いられなくても、対立関係が成り立つことに変わりはない。前節までの多くの例でも、「は」は含まれない。しかし、「は」の対比関係が、一方に肯定が割り当てられ、一方に否定が割り当てられる（推論を含む）ことにおいて成り立つことも間違いない。ここで「XはP、YはQ」という文における「Xは」「Yは」（(70)～(72) でいえば「山田は」

と「田中は」)を「対比点」と呼ぶことにする。

対比型逆接においては、対比点は、逆接関係の対立枠を表示するという役割を担うことができる。(70) (71)において「山田は」と「田中は」は、逆接関係の対立枠である。

(73) 中学校までは給食があったが、高校からはお弁当になった。
という例においても、「中学校までは」「高校からは」という対比点は、逆接関係の対立枠でもある。しかし、対立枠が「は」で表示されないことも多い。(72)の対立枠は、aは「山田が」と「田中は」、bは「山田は」と「田中が」であり、「が」の方は対比点ではない。(73)は

(74) 中学校まで給食があったが、高校からお弁当になった。
のように「は」がない文も可能で、この文の対立枠は「中学校まで」と「高校から」である⁸⁾。また、逆接関係に対立枠は必ず存在するが、潜在することも多いのであった。

(75) a 希望としては参加したかったが、現実には無理だった。
b 参加したかったが、無理だった。
aは「希望としては」「現実には」という対比点が対立枠を表示するが、bは対立枠が潜在し、対比点は存在しない。

逆接の対立枠と対比点「Xは」「Yは」の位置が一致しない場合もある。
(76) 優勝に手が届くことはなかったが、三位になることはあった。
(77) 優勝には手が届かなかったが、三位にはなった。
という例は、「優勝に手が届く」という高程度の事柄には否定が、「三位になる」という低程度の事柄には肯定が割り当てられることにおいて対立するもので、(76)は対比点が対立枠を示しているが、(77)はその位置がずれ、「優勝」「三位」という程度差を端的に示す名詞に「は」がついている。

推論想定型逆接においては、
(78) 秋になったが、なかなか涼しくならなかった。
という例で言えば、「想定としては秋になれば涼しくなるのに対して、実際にはなかなか涼しくならなかった」という対立で、「想定としては～、実際のところは」という対立枠は潜在している。これに「は」が共起して、

(79) 秋にはなったが、なかなか涼しくはならなかった。
という場合、「秋になる」と「涼しくなる」という随伴する二つの事柄において、「秋に」は「なった」という肯定が、「涼しく」には「ならなかった」という否定が割り当てられるという関係が前面に出る。「が」の推論想定型(広タイプ)は、対立枠は「Pからの推論によって想定されたRは～、実際のQは～」というものであるが、言い換えれば、推論によって想定されるRとQの肯定否定の対立を背景にPとQが対立するということもできる。(78)で言えば、「秋になった」と「涼しくならなかった」が肯定否定の対立をなすのは、「秋になったから涼しくなる」という推論によるのであるが、文の表面に現れる対立は「秋に」には「なった」が結び付き、「涼

しく」には「ならなかった」が結びつくことである。その対立関係を対比の「は」が明示するのである。ただし、その部分は固定的ではなく、「は」の位置が動くこともできる。

(80) 秋になりはしたが、なかなか涼しくはならなかった。

(79) と (80) とは特に意味的な違いはない。

以上のように、「は」は対比点を形成し、肯定と否定の対立枠を示す働き、あるいは、PとQにおける対立の位置を端的に示す働きを持つものである。

さて、対比の「は」は「にもかかわらず」節には現れにくいということがある。(80)の「が」を「にもかかわらず」に置き換えると、前件に「は」のある(81)aは「は」のないbよりも許容度が落ちる。

(81) a?秋にはなったにもかかわらず、なかなか涼しくはならなかった。

b 秋になったにもかかわらず、なかなか涼しくはならなかった。

(82) (84) を「にもかかわらず」に置き換えた(83)(85)も同様である。

(82) 読者に若い世代を意識したために使われる文体は平易ではあるが、戦争を主題にしただけに語られる内容は深い。(毎日2015)

(83) a?文体は平易ではあるにもかかわらず、戦争を主題にしただけに語られる内容は深い。

b 文体は平易であるにもかかわらず、戦争を主題にしただけに語られる内容は深い。

(84) 受賞作「流(りゅう)」は、抗日戦争、国共内戦の歴史を生きた祖父の死が題材だ。日本語で書かれてはいるが、複雑系台湾人のアイデンティティーを表現した台湾現代文学なのだ。(毎日2015)

(85) a?日本語で書かれてはいるにもかかわらず、複雑系台湾人のアイデンティティーを表現した台湾現代文学なのだ。

b 日本語で書かれているにもかかわらず、複雑系台湾人のアイデンティティーを表現した台湾現代文学なのだ。

「秋になったが、涼しくならなかった」と「秋にはなったが、涼しくはならなかった」とを比べると、後者の「秋にはなった」は、対比「は」の働きによって、単に「秋になった」のではなく、それと反対のことがあるということを見越しながら「秋になった」と表明しているという意味合いが伴う。留保つきで「秋になった」と言っているのである。一方、「秋になったにもかかわらず、涼しくならなかった」は、「秋になった以上、涼しくなったと推量される／期待される」ということを表し、「秋になった」ことは「涼しくなる」ことを引き起こすものとしてある。「秋になった」が「は」を伴うと、その反対のことは見越すことになり、「涼しくなる」ことを引き起こすという働きと齟齬することになる。このような「にもかかわらず」の強い性格が「は」と共起しにくい理由ではないかと考えられる。

もっとも、「にもかかわらず」文の前件に対比「は」がまったく用いられないというわけではない。(59)「一朝一夕にはできないことにもかかわらず」のように否定述語では対比「は」

が現れやすく、

(86) 少年から大学までチーム数が4000を超え、野球熱は高いにもかかわらず、選手の受け皿は少ない。 (毎日2009)

のような対比主題も可能である。これらは単文でも「は」が用いられる環境であり、また、
(87) 米国の国内総生産（GDP）に占める医療費の割合は日本のほぼ2倍の15・3％。主要国では最も手厚いにもかかわらず、多くの人々が満足な医療を受けられない皮肉な状況にある。 (毎日2007)

という例の場合は、「他の多くの国々は措いて、主要国では」というように前件の中で潜在的な他の要素と対比されており、前件と後件の対比ではない⁹⁾。

このように、対比「は」は用法の幅が広いため、「にもかかわらず」と共起しにくい場合も、共起し得る場合もある。これに対して、次節に見る対比の「こそ」は、用法の幅が狭いため、接続助詞の種類によって、共起関係の有無が明確に出やすい。

8. 対比「こそ」と接続助詞との共起

対比「こそ」は、接続助詞によって共起のしやすさに相違があり、「が」には用いられやすいが、「にもかかわらず」には用いられ難い。現代日本語書き言葉均衡コーパスの2000年代(2000～2009)を対象に語彙素「こそ」を検索すると863例が得られる。その中で「こそ」が強調の意味を表すと見られる48例を除き、対比の意味を表す815例について、共起する接続助詞の内訳は次の通りである。

表											
が	けれども／ けれど／ けど	ものの	にもかかわらず	のに	とはいえ	ながら	ても	も	已然形	已然形 +ど／ ども	他
450	48	151	0	1	4	4	9	2	118	12	16

「が」が450例、その文体的変異と考えられる「けれども、けれど、けど」が48例あるのに対し¹⁰⁾、「にもかかわらず」は0例である。このような差が生じる事情について次節以降で考察する。

それ以外の助詞について言えば、少なくとも、「ものの」は「が」と類義的で、「こそ」とも共起しやすく、一方、「のに」は「にもかかわらず」と類義的で「こそ」と共起し難いということとはできる^{11) 12)}。しかし、「ものの」と「が」、「のに」と「にもかかわらず」の異同について本稿で扱う余裕はなく、別の機会を期す。

9. 「こそ」の特徴

「こそ」は、「は」と同様、対比関係を表す用法を持つが、「は」が対比を表すのに広く用いられるのに対して、「こそ」には制限が多い。丹羽（2006:326-329）にも述べたが、ここで再論する。

まず、「こそ」は逆接関係を表す複文の前件にしか用いられない。対比の「は」は単文でも用いられる。

(88) 週に3回はジムに通う。

これは、意味的には、「毎日というほどではないが、週に3回はジムに通う」というような逆接関係の複文と対応する。また、対比「は」は、並列関係にも用いられる。

(89) 夏は暑く、秋は涼しく、冬は寒い。

この文は、「夏」・「秋」・「冬」にそれぞれ「暑い」・「涼しい」・「寒い」が割り当てられて、互いに区別される関係を表す。この(88)や(89)のような用法を「こそ」は持たない。

逆接構文の前件に用いられる中においても「こそ」には制限があり、「こそ」を含む前件は、後件に対して例外や小部分である、価値的に小事でしかないといった場合に用いられる。例外や小部分というのは次のような例である。

(90) その家も、名義こそ父になっていましたが、夫や私も働き、家族全員で築いた財産でした。
(親が子に望んでいることが子が親にできること)

(90) は、「その家」が「家族全員で築いた財産」としてある中で「名義が父になっていた」という例外があることを表している。また、

(91) 体育の授業こそ見学だったが、その他のことはなに不自由なく、角田は元気に小学校生活を過ごしていた。
(現代)

(92) 宮本武蔵は晩年こそ熊本の細川家に客分として遇されますが、生涯のほとんどを無所属の牢人（浪人）として過ごした、いわば流浪の剣客でした。

(宮本武蔵・最強伝説の真実)

(91) は「小学校生活」の中で「体育の授業」という小部分と「その他のこと」という大部分とが対比されており、(92) は時間的な対比で、「生涯のほとんど」に対して「晩年」は小部分である。

前件が後件の例外・小部分でないという場合も、前件は後件に比べて小事として評価される。

(93) 日差しこそ強いが、風が涼しく感じる中での練習。
(神戸新聞)

(94) 店は間口こそせまいが、奥はある。
(江戸の敵)

(95) わたしは映画を発明こそしなかったが、産業化した。
(何が映画を走らせるのか)

(96) 昼間こそ利用客がいるものの、夜になると不気味なほど静まりかえっている。

(呼び出し)

(93) は「日差しが強い」と「風が涼しく感じる」との対比で、ここでは後者が重要で「練習」環境がよいと感じられる中で、「日差しが強い」というマイナス面はあるが、大きなことではないと評価されている。(96) でいえば、「昼間」と「夜」の対立で、(92) と異なり時間の長さは対等であるが、後件のマイナス評価が大きく、前件は重視されていない。前件と後件が程度差を持つ場合も、

(97) 1 番人気に支持されたエリザベス女王杯では、1 着こそ逃したが 2 着とキッチリ結果を出している。
(「1 番人気→万馬券」の法則)

(98) 晴明はへたり込みこそしなかったが、妙に力が抜けるのを感じた。(晴明ふしぎ草子)
これらは高程度の側に「こそ」が用いられるが、「2 着ときっちり結果を出す」中で「1 着を逃した」ことは重視されず、「妙に力が抜ける」が成り立つ中、「へたり込む」ことは極端なこととして排除されている。

以上、いずれも「こそ」を含む前件は、後件に対して小事として位置付けられるという点で共通するものである¹³⁾。これらとは逆に、前件が大きな部分であるような場合には「こそ」は用いられない。

(99) a みんなはいつものように喋っていたが、秀人とわたしはぎくしゃくしていた。
(天の前庭)

b? みんなこそいつものように喋っていたが、秀人とわたしはぎくしゃくしていた。

(100) a 4 コーナーまでは 3 番手の好位置だったが、最後の直線で失速。(毎日1996)

b? 4 コーナーまでこそ 3 番手の好位置だったが、最後の直線で失速。

(99) 「みんな」は全体を表し、(100) 「コーナーまで」は到達点を表して、小部分・小事ということはできない。

(101) a ストーリー自体はお粗末だが、彼らの人間離れした動きにはびっくり。(毎日2001)

b? ストーリー自体こそお粗末だが、彼らの人間離れした動きにはびっくり。

c ストーリーこそお粗末だが、彼らの人間離れした動きにはびっくり。

という例では、「自体」という強調語句があるため、b のように「こそ」が不自然である。c のように「自体」がなければ「ストーリーがお粗末」であることを小事扱いできる¹⁴⁾。

10. 「こそ」と「が」および「にもかかわらず」

さて、8 節の表のように、「が」は「こそ」と共起しやすいが、「にもかかわらず」は共起しにくいのであった。具体的には次のような例である。

(102) a 店は間口こそせまいが、奥はある。(= (94))

b? 店は間口こそせまいにもかかわらず、奥はある。

(103) a 店は間口はせまいが、奥はある。

b 店は間口はせまいにもかかわらず、奥はある。

(104) a クラブのなかは、照明こそついていたが、ダンスフロアはがらんとしていた。

(鉤爪の収獲)

b? クラブのなかは、照明こそついていたにもかかわらず、ダンスフロアはがらんと
していた。

(105) a クラブのなかは、照明はついていたが、ダンスフロアはがらんとしていた。

b クラブのなかは、照明がついていたにもかかわらず、ダンスフロアはがらんと
していた。

(102) (104) のように、「こそ」の場合は「にもかかわらず」に置き換えると不自然な文になる ((105) b は、7 節のように対比の「は」と共起しにくい例なので、「が」にしてある)。

「にもかかわらず」は推論想定型逆接の狭タイプを表すのであった。(103) で言えば、「間口が狭い」のだから「奥も狭い」と推量されるところ、実際には「奥はある (広い)」。言い換えれば、「にもかかわらず」が形成する関係において、「間口が狭い」ことは、「奥が広い」とは反対の推量「奥も狭い」を引き起こすものである。一方、「こそ」の形成する関係においては、「間口が狭い」ことは「奥が広い」ことに比べて小事なのであった。ここにおいて、「間口が狭い」は「奥が広い」と反対のことを引き起こすだけの存在でありながら、「奥が広い」よりも小事であると位置付けるところに齟齬がある。この齟齬ゆえに、「にもかかわらず」と「こそ」が共起しないのでないかと考えられる。

11. おわりに

本稿では次のことを述べた。

- 1) 逆接関係とは、前件 P と後件 Q、および、 $P \rightarrow R$ 、 $Q \rightarrow S$ という推論 (意味論的含意、語用論的な推意) において肯定否定の対立関係をなすものである。
- 2) 逆接関係には必ず「x において p だが、y において p でない」と模式できるような対立枠がある。対立枠は文に顕在することも潜在することもある。
- 3) 逆接関係には、(ア) 対比型逆接関係と (イ) 推論想定型逆接関係がある。対比型は対立枠が前件・後件に内在するが、推論想定型は「前件から推論される話者の想定では～、実際には～」のような対立枠を形成する。
- 4) 「が」は対比型逆接の広タイプで種々の対立があるが、「にもかかわらず」は対比型逆接の狭タイプで、推量・希求されることと実際のこととの対立に限定される。
- 5) 「が」は推論想定型逆接の広タイプで、前件からの推論によって想定されたことと後件の実際のこととの対立を表す。「にもかかわらず」は推論想定型逆接の狭タイプで、前件からの推論によって推量・希求されたことと後件の実際のこととの対立を表す。

- 6)「は」が示す対比点は、逆接関係の対立枠を表示する働き、あるいは、前件Pと後件Qにおける対立の位置を端的に示す働きを持つ。
- 7)「が」は、対比の「は」と自然に共起するが、「にもかかわらず」のPからRを推量・期待するという性格が対比の「は」の性格と齟齬するところがあり、対比「は」と共起しにくい場合がある。
- 8)「が」は対比「こそ」と自然に共起するが、「にもかかわらず」は共起しない。これは、「にもかかわらず」のPからRを推量・期待するという性格と、「こそ」のPを小事と位置づける性格とに齟齬があるためである。

【注】

- 1) 加藤(2001:70)は、全否定の場合は、接続詞「でも」や「しかし」を用いることができないと指摘している。
- [1]「ここ、間違ってますよ。」「*でも、間違っていないよ。」
- [2]「次は右折ですね。」「*しかし、左です。」
- 2) 実例は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)と『CD-毎日新聞データ集(本社版)』による。前者はその「書名/出典」を示し、後者は「毎日 2015」のように記す。表示がないものは作例。
- 3) (ア) 対比型か (イ) 推論想定型か紛らわしい場合もある。
- [1] 山田さんは、この店の店長だが、社長ではない。
- [2] 山田さんは、この店の店長だが、社長でもある。
- [1]は(ア1)で、「山田さん」が「この店の店長」の地位にはある一方で、「社長」という地位には至っていないという対立を表す。これに対して、[2]は、後件が前件と同類の事柄であるもので、「この店の店長」であるという言明と量の格率から、それ以外の地位にあるわけではないと想定されるところ、実際には「この店の店長」というだけでなく「社長でもある」という対立関係が成り立つ、という(イ)推論想定型の例である。
- 4) 旧稿(丹羽1998)は、(ア)対比型に相当するものを「同一世界内における対立」、(イ)推論想定型に相当するものを「二つの世界の間における対立」に分け、後者を「現実と話者の心(思い・考え)との対立」、「話者の心と現実との対立」、「話者の一つの心ともう一つの心との対立」の三つに下位区分し、(ア4)にあたるものをこの三つに振り分けている。しかし、「話者の心(思い・考え)」というのが曖昧で、用例の分類にも支障があるので、本稿ではこの説を撤回する。ただ、(ア4)の中で(21)(30)のような話者の考えたことと現実のこととの対立を表す例は、(ア)と(イ)の中間的な位置にあり、旧稿のように(イ)の側に位置付けられる面もあることは否定できない。
- 5) (49)(50)の例は、後件の前提を表す非逆接用法の「が」である可能性が考えられなくはないが、「私事ではあるものの」「徐々にはあるものの」のように「ものの」に言い換えられるところから、これらも逆接表現と認められる。前件と後件の発話行為とが逆接関係をなすものとしては、(37)「一口では説明できないが」や、他に「言葉は悪いが」「うろ覚えだが」「これは推測に過ぎないが」などがある。
- 6) 当為の「べきだ」の場合、稀ながら、「にもかかわらず」と共起する例がある。
- [1] 人口減少の時代、五輪後の集客が見込めないにもかかわらず、巨大化を求めるべきではない。

(毎日2014)

他方、本稿では立ち入らないが、「のに」の場合、意志や命令などを表す場合でも、[2]のような例が成り立つことが知られている(田野村1989)。

[2] 雨が降っているのに、出かけるのは {やめておこう/やめておけ}。

「雨が降っている」ので「出かけない」ことを話者は期待するのであるが、それに反して「出かける」ことが成り立ちそうな状況にあるのを取りやめる/阻止するという場合に用いられる。それに対して、「にもかかわらず」の[3]は不自然である(丹羽1998)。

- [3] 雨が降っているにもかかわらず、出かけるのは {やめておこう／やめておけ}。
 モダリティの諸要素との共起制限は、他の接続助詞も合わせて、なお精査が必要である。
- 7) 推論想定型においては、多くは、「Pから推論して想定されたRがQと対立する」という関係であるが、中には、「Pからの推論で想定されたRが、Qから推論されたSと対立する」という例もある。例えば、
 出稼ぎふうの黒人がいつも大勢たむろしているのだが、そのうちの数人がケンカをしていた。私たちは巻き込まれないように避けて歩いていたにもかかわらず、一人が投げたデカイ靴が、友人のお尻に見事に命中した。
 (マツモトヨーコの脱日常紀行)
 という例は、「避けて歩いていた」から「巻き込まれない」ことが予想されたところ、現実には、それに反して、「一人が投げたデカイ靴が、友人のお尻に見事に命中し」て、「巻き込まれてしまった」という関係にある。このようにRとSが対立する例がどのような場合に可能なのか、詳細は明らかではない。
- 8) 「が」の逆接文において、対比の「は」が義務的な場合とそうでない場合とがあり、そこにどのような条件が働いているかという問題もあり、本稿はこれについても立ち入ることができない。
- 9) 前件の中での対比関係を表す例としては、
 (37) 一口では説明できないが、国家公務員と地方公務員のちがいのようなものがある。
 も同様で、「言葉を費やせば説明できるかもしれないが、一口では説明できない」という関係にある。
- 10) ただし、「が」が、
 行こうが行くまいが、俺の勝手だ。
 のように逆接仮定条件を表す用法は、「けれども」などにはない。それ以外は、文体的には異なっても、文法的には等しい。
- 11) これはそれぞれの助詞の当該コーパスでの使用度数にも関わる。BCCWJの2000年代以降で、語彙素「が」&接続助詞は300,275件、語彙素「けれど」(「けど」「けれども」も含む)&接続助詞は69,952件、合わせて370,227件、そのうち「対比こそ……が／けれど」が498件で、約0.13%にあたる。「ものの」は語彙素検索ができないので、便宜的に「ものの、」という文字列を検索すると3,902件、そのうち「対比こそ……ものの」が151件で、約3.9%にあたる。これに対して、「にもかかわらず」は文字列検索で3,036件、うち「こそ……にもかかわらず」は0件。「のに」は「のに、」という文字列を検索すると11,982件、うち「こそ……のに」が1件で、約0.008%にあたる。
- 12) 注4でも触れた旧稿の説と本稿の説(見通しを含む)を対比しておく。

旧稿	助詞	本稿および見通し
自由対立型	「が」「ても」「ながら(も)」	対比型と推論想定型(広タイプ)
程度量型	「ものの」	
反推量希求型	「とはいえ」	推論想定型(狭タイプ)
	「にもかかわらず」「のに」	

- ここで旧稿についての説明をすることはしないが、「が」のタイプと「にもかかわらず」のタイプに分けるのは、旧稿も本稿も同じ。旧稿で「ものの」を「程度量型」、「とはいえ」を「反推量希求型」としていたのは、観察が不十分で誤りであった。「ても」「ながら(も)」 「ものの」「とはいえ」は「が」と同じタイプに属すると見られる。もちろん同じタイプというだけで、同義ではない(それぞれ(7)(22)・(52)(53)の定義とは異なる)。いずれにせよ、これは対比型、推論想定型という観点からの分類であり、仮定条件を表すかどうか、従属度の高低はどうか、などという別の観点の分類もあり得る。
- 13) 「……こそ……已然形、……否定述語」という構文があり、これは、後件の事柄が否定される中で、前件で反対方向の事柄が部分的に成り立つ可能性があり、全体として後件の否定が強化される、ということを表す。
 [1] 「良き人間関係」の重要さは増えこそすれ減るとは思われない。(回想外交五十年)
 [2] 日本の国益のマイナスにこそなれプラスになるとは思えません。(yahoo!知恵袋)
 これも前件は小部分である。
- 14) 「こそ」は、述語内部には生起しにくいという傾向がある。
 [1] ダグの淹れたコーヒーは、粗野な味だが旨かった。(小説宝石)

[2]?ダグの淹れたコーヒーは、粗野な味でこそあるが旨かった。

[3] ダグの淹れたコーヒーは、味こそ粗野だが旨かった。

[2] はあまり自然でないが、[3] は自然である。述語内部では対比点が曖昧になるからかもしれない。副詞に「こそ」が下接しにくいなど他の制約もあるが、ここで立ち入ることはできない。

【引用・参考文献】

石黒圭（1999）「逆接の基本的性格と表現価値」『国語学』198（国語学会）

加藤重広（2001）「照応現象としてみた逆接－『しかし』の用法を中心に－」『富山大学人文学部紀要』34

加藤重広（2004）『日本語語用論のしくみ』（研究社）

田野村忠温（1989）「不適条件表現に関する覚書－現代日本語の二種の文法現象をめぐって－」『奈良大学紀要』17

仁科明（2014）「順接と逆接」日本語文法学会編『日本語文法事典』（大修館書店）

丹羽哲也（1998）「逆接の接続助詞の諸相」『人文研究』50-10（大阪市立大学）

丹羽哲也（2006）『日本語の題目文』（和泉書院）

渡部学（1995a）「ケレドモ類とシカシ類－逆接の接続助詞と接続詞－」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義 表現の文法（下） 複文・連文編』（くろしお出版）

渡部学（1995b）「ケド類とノニ－逆接の接続助詞－」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下） 複文・連文編』（くろしお出版）

Adversative conjunctive particles *ga* and *nimokakawarazu* and contrastive particles *wa* and *koso* in Japanese.

NIWA Tetsuya

The adversative constructions “*P-ga, Q.*” form opposed relations between P or R inferred from P and Q or R inferred from Q. These constructions have overt or covert frames of opposition and are classified either as “a contrast type” such as *daidokoro-wa hiroi-ga, syosai-wa semai*. (The kitchen is large, but the study is small.) or “an inference and assumption type” such as *haru-ni natta-ga, mada samukatta* (Spring came, but was still cold.) . The latter type forms an opposing relationship between the matter that is inferred and assumed from the protasis and the matter in the apodosis. “*P-nimokakawarazu, Q.*” constructions, however, have limited usage. Contrastive *wa* functions indicate the frames of opposition or the position of the opposition, and the contrastive *koso* ranks the protasis as minor compared to the apodosis. Since it has a strong feature that it presumes or expects R from P, *nimokakawarazu* rarely co-occurs with a contrastive *wa*, and does not co-occur with the contrastive *koso*.